

「JENESYS2019」中国青年メディア関係者代表団第2陣（招へいプログラム）の記録 （対象国：中国、テーマ：医療・介護、教育）

1. プログラム概要

中国国务院新聞弁公室が派遣した中国青年メディア関係者代表団第2陣計56名が、11月10日から11月17日までの7泊8日の日程で来日しました（団長：夏光明（カ・コウメイ）中共中央委員会宣伝部 弁公庁 副主任）。一行は2つの分団に分かれ、東京のほか、愛知・三重・千葉・福岡・山口を訪問。各地でメディア訪問・交流を行い、同じ分野で活躍する日本の青年と日中共通の課題等を話し合いました。また、分団ごとのテーマである「医療・介護（第1分団）」、「教育（第2分団）」について、関連施設の視察を行うとともに、自由取材や農家民泊、地方の歴史・自然・文化等を見学し、日本の魅力を体感しました。中国青年メディア関係者は今回の訪日で多くの人々と交流し、日本人の考え方に触れ、多角的に日本理解を深め、見聞したことや体験したことを自身のSNS等を通じて発信しました。また、報告会で帰国後のアクション・プラン（活動計画）について、各分団の代表者が発表しました。

2. 日程

11月10日（日）：東京都

羽田空港より入国

【参観】日本科学未来館

【オリエンテーション】

11月11日（月）～11月15日（金）

2分団に分かれてプログラムを実施。第1分団は愛知県・三重県、第2分団は千葉県・福岡県・山口県を訪問。地方プログラム終了後、11月16日に東京へ移動。

【歓迎会】

●第1分団（医療・介護）：東京都/愛知県/三重県

【訪問・意見交換】日本テレビ放送網(株)、(株)中日新聞社

【講義聴講】三重県四日市市高齢福祉課

【自由取材】巣鴨地蔵通り商店街

【視察・交流】オリンパスミュージアム、社会福祉法人シルヴァーウィング（特別養護老人ホーム「みさよはうす富久」、小規模多機能型居宅介護・通所介護施設「戸山いつきの杜」）、社会福祉法人「青山里会」、医療法人 SIRIUS「いしが在宅ケアクリニック」、鈴鹿ロボケアセンター、農家民泊（三重県大紀町）

【文化体験】温泉旅館宿泊

【見学】徳川園、伊勢神宮

●第2分団（教育）：東京都/千葉県/福岡県/山口県

【訪問・意見交換】(株)TBS テレビ、(株)西日本新聞社

【講義聴講】文部科学省、山口県下関市教育委員会

【自由取材】十条銀座商店街

【視察・交流】カンドゥー（職業体験施設）、下関市立夢が丘中学校、農家民泊（山口県萩市）

【文化体験】温泉旅館宿泊

【見学】門司港レトロ、秋芳洞

11月16日（土）

【報告会】訪日成果・帰国後の活動計画発表

11月17日（日）

羽田空港より出国

3. プログラム記録写真

＜共通＞	
	
11月10日【参観】日本科学未来館	11月11日【歓迎会】外務省 アジア大洋州局 中国・モンゴル第一課 丸山浩一地域調整官による挨拶

＜第1分団＞（訪問地：東京都、愛知県、三重県）



11月11日【視察・交流】社会福祉法人シルヴァーウィング



11月12日【訪問・意見交換】日本テレビ放送網(株)



11月12日【自由取材】巢鴨地蔵通り商店街



11月13日【訪問・意見交換】(株)中日新聞社



11月14日【講義聴講】三重県四日市市高齢福祉課



11月14日【視察・交流】社会福祉法人「青山里会」



11月14日【視察・交流】鈴鹿ロボケアセンター



11月15日【視察・交流】農家民泊（三重県大紀町）

＜第2分団＞（訪問地：東京都、千葉県、福岡県、山口県）



11月11日【講義聴講】文部科学省



11月11日【訪問・意見交換】(株)TBS テレビ



11月12日【視察・交流】カンドゥー（職業体験施設）



11月12日【自由取材】十条銀座商店街



11月13日【訪問・意見交換】(株)西日本新聞社



11月14日【講義聴講】山口県下関市教育委員会



11月14日【視察・交流】下関市立夢が丘中学校



11月15日【視察・交流】農家民泊（山口県萩市）

4. 参加者の感想（抜粋）

第1分団（医療・介護）

○交流を通じて、日本はテレビや新聞といった従来型のメディアが依然としてメインとなっていることを知った。中国と同様にインターネットの攻勢を受けているとはいえ、近年でも安定したシェアを維持している。中国の従来型メディアとは、大きく状況が異なる。中国のメディアは各所で崖崩れ的な崩壊が起きており、5Gの運用が開始されれば、ニューメディアの攻勢は主客転倒にまで至るだろう。中国のメディアはまさに懸命に活路を求めているが、日本のメディアは現在の平穏の中で、将来の衝撃がいかに深刻なものか、まだ実感がないようだ。現在、中国のメディアが直面している苦境も、今後10年のうちには、日本のメディアにも降りかかるだろう。

これと類似して、今後20年の中国の高齢者介護問題も、現在の日本に見る高齢化の加速という問題に直面するだろう。今回視察した、老後生活の体系や介護制度、介護テクノロジー分野の現実の取り組みやモデルは、とても参考になった。特に、青山里会の高齢者施設や鈴鹿ロボケアセンターのロボットなどは、非常に勉強になった。

○オリンパスミュージアムを見学し、カメラ部門はこの企業のごく一部分なのだと初めて知った。顕微鏡、内視鏡、望遠鏡などのメイン事業があり、細胞の一つ一つから壮大な宇宙全体までを見つめている企業なのだと知った。

高齢者介護や医療機関を複数視察した。さまざまな科学技術とヒューマンケアを同時に取り入れる介護の手法は、まもなく高齢化社会を迎える中国にとっても、大きな啓示となる。青山里会をはじめとする多くの医療介護機関で重視しているのは、高齢者の“尊厳のある”暮らしであり、いかにして平穏にお迎えを受け入れるか、ということである。彼らは高齢者をできるだけ社会から隔離せず、孤独な病院のベッドに寝かせたままにせず、社会から隔絶した養老院に入れずに、たとえ介護や医療が必要でも、できるだけ自宅や地元に残そうとしている。彼らのこうした努力のあり方、高齢者の感情も十分にケアをしていることが、深く印象に残った。

日本テレビ放送網と中日新聞社での同業者との交流では、ともに業務について討論し、職業人生の苦楽、挑戦、チャンスなどについて、また、いかにして世論の立場を死守するか、ニューメディア時代への華麗なる転身をどのように実現するか、などについて、意見を共有した。この交流によって、互いに共感が得られた。

自由取材やホームステイでは、日本の一般の庶民と踏み込んだ交流ができ、厚い友情も結ぶことができた。まさに、日本人の言う“一期一会”である。しかし、ひとたび巡り合ったからには、ちょうど宇宙で二つの星が衝突したのと同じように、必ずやお互いに影響しあい、将来の軌道も変わってくるだろう。

○日本側の入念な手配により、日本の老後、医療、介護に関する事業所や研究所などを視察する機会に恵まれ、この分野に関する日本の現状について理解を深めることができた。

私自身も、業務では主に医療関連の報道を担当しており、日本の医療の現状も多少は理解している。タケダ、エーザイ、小林製薬などの日本企業への取材経験もある。今回の視察や取材ではさらに、日増しに深刻化する高齢化問題に対し、日本では介護や医療の面で例えば居宅介護と在宅医療との連携など、さまざまな努力や試みをしていることを知ることができた。特に終末期の高齢者の介護においては、心のこもった手当をするだけでなく、高齢者が質の高い晩年を送れるようにし、さらには介護職の人々にも配慮して、介護者の負担や労働の軽減を図るような介護補助機器を開発する企業も存在している。このことが強く印象に残った。同時に、中国と日本の最も大きな相違点だと感じた。高齢者を介護するだけでなく、介護者のことも考慮するという点は、中国の状況と全く異なる。介護者の便宜をいかにより高めるか、という問題について、改めて中日双方で交流ができるのではないだろうか。

さらに、日本での在宅での終末ケアやリハビリ補助ロボットの研究に関しても、印象深かった。ともに高齢化社会に向かうという現状に直面し、双方により多くの交流の機会があることを信じたい。

○“テクノロジーは生活を変える。”これが、私が日本の医療介護機関や企業を視察して感じた、最も大きな実感である。先進的な介護ベッドや外出に便利な車いす等の機器は、高齢者に寄り添った心地良さを提供するだけでなく、介護職員の仕事量も軽減することができる。特に、アザラシや子犬型の人工知能ロボットは、高齢者の寂しさをなぐさめ、癒し、とても深いヒューマンケアを実現することができる。医療や介護が単純に衣・食・住・行動を解決

するものに留まらず、高齢者に感情の癒しを与え、人生の最晩年に穏やかで心地よい生活を提供している。

どんなものでも参考になる。私は自らのペンを以って、日本での収穫を読者に、特に医療介護分野の友人たちに紹介し、中国の医療介護の業務をより一層改善していきたい。

○日本は高齢化率が25%以上に達する国で、中国と比べれば、より早期に高齢者問題の負担とプレッシャーに直面している。今回、地域密着の高齢者サービス事業所や医療との連携、医療機器メーカーなどを視察し、日本の医療介護分野について理解を深めた。重圧と言える高齢化の問題に直面し、日本は保険の普及を強大な支柱とし、詳細で入念なサービス体系を作り、高齢者の年齢(75歳以上と以下)や健康状態の違いに基づいて、個別の適切な介護サービスを展開している。高齢者が安心して晩年を過ごせるようにしていることに、非常に感動した。特に感動したのは、日本では民間企業や社会団体が次々と介護サービス分野に参入している点である。居宅サービスや在宅介護の例に見るように、日本の大多数の高齢者が自宅で老後を過ごし、臨終を迎えたいと希望する現状に対して、総合診療科の医師が在宅療養の高齢者を往診しケアを行う、あるいは末期がん患者や重症患者の終末ケアを行うなど、患者が平穏に、辛さを感じず、最後の日々を過ごせるようにしている。このことはまた、その家族にも生と死という深い教育を行うことになる。とても学ぶべき部分である。中国でも、ほとんどの高齢者が自宅で晩年を過ごす、生と死の認識や理解は日本とは異なり、多くは死への恐怖である。今回の訪日を通じて私は、より多くの全く新しい文化の思考を受け入れ、より健康的に、プラスの情報を伝えて行きたい。

第2分団（教育）

○我が代表団のテーマは“教育”であり、同時に、我々の仕事と関連深いTBSや西日本新聞社など、数社のメディアも視察訪問した。数日間の交流や視察を通じて、深い印象が残った。

1. 職業教育における“活用型”という理念。中国では、ほとんどの基礎教育が依然として“点数論”であり、“進学進級”が目標であって、教育の本質である社会的な意義の考慮や評価はやや欠けている。特に、視察をした子供の職業体験施設“カンドゥー”では、子供たちを楽しく遊ばせながら、職業や仕事の責任と意義を体験させ、子供の将来の“希望の種”を埋没させない。こうした方法は、中国においてもとても高い参考価値があると思う。

2. 自ら攻勢し、従来型メディアの“地位を確保する”。中国の多くの従来型メディアと同様、日本の新聞やテレビもニューメディアの攻勢を受けている。では、いかにして“陣地”を守り、“メイン”を勝ち取るか？西日本新聞社での視察と交流の際、彼らの「こどもタイムズ」の紹介があった。生き生きとした形式で、子供や小学生の毎日の生活に新聞を“浸透”させ、さらに学校教育にも浸透させている。中国でも、多くの新聞やテレビメディアが子供記者団や青少年チャンネルを行っている。いかにして自社の資源をより効果的に活用するか、自ら攻勢して“地位を確保する”姿勢、これを深く考えねばならない。

3. 仕事への謹厳さと執着。TBSでの交流で、一人のベテラン先輩記者の姿勢に強く触発された。彼はスクープを得るために、自ら関係機関の責任者の家を毎日、しかも朝晩一回必ず訪ねたそうだ。こうした真剣な、真面目な、執着のある精神が、非常に勉強になった。

○初めて代表团として日本を訪問し、深い印象と美しい思い出が残った。

まず、日本が幼児教育を重視している点である。子供の教育を教科書や授業だけで終わらせず、社会への関心や視野も養っている。これらは、我々も学び参考にすべきである。とりわけ、下関市立夢が丘中学校の訪問では、生徒たちが情熱的に入念にプログラムを準備してくれ、非常に味わい深いものとなった。両国国民の交流は青少年の肩にかかっている。中日の青少年が様々な方式や相互交流活動を通じて、理解を促進し、友情を深め、中日の美しい友好のために確固たる基礎を築くことを願う。

次に、メディアの一員として、TBS と西日本新聞社を視察した。日本の報道の理念と技術は、早くから中国でも知られており、特にテレビの影響力はとても大きい。見れば見るほど、日本の同業者たちの職業意識の高さと報道の理想への執着心を感じた。当然ながら、現代の情勢においてはインターネットの登場によって、ニューメディアが従来型のメディアを日々、おびやかしている。競争にしても提携にしても、中国はこの面では日本の先を進んでいる。とはいえ、まだ“手探りで川を渡る”状態であり、十分なモデルや参考対象はまだない。双方が共同で考え、ともに新時代のニューメディアとの融合という挑戦に対応して行かなければならない。

西日本で目に飛び込んできたのは、壮大な海原と美しい山河である。萩市でのホームステイでは、一歩踏み込んだ交流体験ができた。私にとって日本滞在中の最も素晴らしい一夜であり、美しい思い出が残った。日本人の友好と善良な心は、我が代表团全員の心に深く浸透した。友情が長く続きますように、また会いましょう。

○1. 中国に比べ、日本の学校には人情味があり、子供たちの多様な個性の発展を重視している。中国の子供たちの宿題の量は日本よりはるかに多い。果たして成績だけが唯一の評価基準なのか、我々は改めて考え始めた。

2. メディアの面では、日本の新聞は依然として繁栄を続けていると知った。比較すると、中国のメディアのネット化のスピードはとても早く、これには根本的な要因としてニュースメディアの著作権保護の問題があると気付いた。中国のニュースはあっという間に転載され、大衆は新聞や公式ホームページチャンネルから情報を得る必要がない。この点を我々は重視し改善して、将来のメディアの生存環境を改善しなければならない。

3. 日本の子供たちは放課後にも数多くの課外活動がある。こうした課外活動は子供の知識を高めるだけでなく、生活や愛情も教えることができる。自分の身の回りをいかに管理し、家族のことを考え、いかにして他人や大自然と接していくか、ということを教えてくれる。このようにして育った多くの子供が自己調節管理能力を持ち、よりたくましく、楽観的に、積極的になる。中国の学校でも同様の活動が実施され、子供たちがより良く、よりバランス良く育つことを期待する。

○訪日視察交流を通じて、視野が広がり、見識が深まり、美しい中日の友情を得ることができた。

私の日本に対する全体的な印象は、人々の親切と節約心、清潔で美しい環境、発達したインフラ、至るところに見られるハイテクと人にやさしいヒューマンケアである。これらは明らかに国家としての高い素地の現れである。そして、これらの優れた点の形成はすべて、日本の教育理念に遡るものである。これが今回の訪日視察での最大の目的である。

訪日2日目、我々は文部科学省で地域と学校について講義を受け、理解を深めた。TBSでは、子供の頃に大好きだったウルトラマンを見て感激した。さらに、TBSの同業者との懇談では、64年のテレビ放送の“歴史の厚み”を感じるとともに、「未来へつなぐ。FromTBS」のプロモーションビデオから“はつらつと生気みなぎる”様子を目にした。メディアはどこも視聴率の低下やニューメディアの攻勢を受けているが、互いに励ましあって前進することで初めて、先頭を切っていけるのだ。

訪日4日目、西日本新聞社を訪問し、「こどもタイムズ」に強い印象が残った。「こどもタイムズ」の設立の背景も学んだ。日本新聞協会は、児童や青少年の新聞離れやネット・スマホ依存に対して、“教育に新聞を導入”することを主導している。新聞社内では、編集部門と広告部門と販売部門が部門の壁を取り払い、「こどもふれあい本部」を立ち上げた。社長直属である。この行動と活動事例は、とても印象に残った。今後、自分の仕事においても子供が新聞を手取る時間を作り、子供に自分の記事を編集させ、多くの学校を訪ねてその講座を共有し、子供たちに新聞が身近にあることの重要性を感じさせて行きたい。そして、さらに発展してその親たちにも関心を向けさせたい。

5. 受入れ側の感想

◆メディア関係者

○同じメディアで働く中国の人々の話を聞くことができ、とても有意義な交流でした。質疑応答では、さまざまなテーマについて本音をぶつけあい、率直な意見交換が出来ました。タブーだと思われた政治的な話題が参加者の側から積極的に出てきて、大変、興味深かったです。相互理解を深めるために、こうした取り組みを今後とも続けて頂ければと思います。

○日中のメディアが意見交換をする機会はあまりなく、その点では非常に有意義でした。中国人ジャーナリストの問題意識は高く、経営から編集方針、デジタル化への取り組みなど幅広いテーマについて積極的な質問を受けました。「分からないことは恥ずかしがらずに聞く」というジャーナリストとしての基本中の基本は「日中ともに同じだなあ」と妙に感心しました。受け入れ側が一方的に施設を案内し、説明するだけでなく、意見交換の場を設けたことは良かったと思います。

◆訪問先関係者

○当日は、熱心に説明を聴いていただくとともに、たくさんの質問をいただき、感謝しております。このような国際交流の場におけるさまざまな角度からの質問をいただくことで、本市のコミュニティ・スクールを生かした取り組みのよさや課題を再確認することができました。

○視察を受け入れることにより、生徒達の活動が認められているという意識から関係生徒たちはより誇りをもって活動していたようである。視察される方に失礼があってははいけないという教員側の思いとは関係なく、生徒達は積極的に挨拶をして関わりを持とうとしている姿が多く見られ、代表団の方も翻訳アプリなどを使って意思を伝えようとしていた。

○このような大きな視察団にお越し頂くのはオープン以来で、外国メディアに至っては初めてのことでした。中国の方々がどのような視点で見て、どういった考えを持っているのかなど、今後のインバウンド対策をする上でとても参考になりました。日本と同様、教育に対し

て、とても関心が高いことも感じました。同じアジアの仲間として、将来アジア全体で色々な取り組みができることを願います。

○メディア関係者の皆さまとの交流は初めての経験で緊張しましたが、働く若いママたちで楽しく交流ができました。和食のおでん・手巻寿司・朝食(味噌汁など)も喜んで食べて下さり夕食後は和服の着付け、先生にお願いして茶道の体験をしていただきました。先生も皆さまに茶道を通して日本のおもてなしの心を伝えられたことを大変喜んでいました。

6. 参加者の対外発信

11月12日／社会人／WeChat	11月12日／社会人／WeChat
Day2: 小时候家里第一台家用相机就是奥林巴斯，没想到还生产显微镜和胃镜；日本推广科技助老，将智能设备、大数据等技术引入养老产业将是未来大趋势；2020东京奥运即将到来，气氛渐浓。  日本・東京・Nippon TV (日本テレビ)	这个主题乐园，是给孩子们提供职业体验的，给孩子们感受就很真实，陪演的工作人员感情也很到位，不是那种敷衍小朋友的感觉～ 职业体验后，还会给小朋友们发工资，用来买玩具，通过这种方式告诉他们劳动的价值。 特别适合家长带小朋友来体验，感觉日本对儿童职业培养上面，也是很花心思 收起 
テーマ（医療・介護）についての発信 子供の頃、我が家の初めてのカメラはオリンパス製だった。オリンパスが顕微鏡や胃カメラのメーカーだと、初めて知った。日本はテクノロジーで高齢者を支え、今後はAIやビッグデータをシルバー産業に導入していく。2020年のオリンピックは間もなくだ。ムードは徐々に高まっている。	テーマ（教育）についての発信 このテーマパークでは、子供達が職業を体験することができる。子供達は本当の仕事のように体験し、サポートするスタッフもまた、真に迫っている。子供だましの遊びではない。 職業体験後には、子供に給与が支払われ、それでおもちゃが買える。こうして労働の価値を学ばせるのだ。親子で来るのにとっても良い場所だ。日本では子供への職業教育も、工夫が凝らされている。

11 月 13 日／社会人／WeChat	11 月 14 日／社会人／WeChat
福岡，西日本新闻社。与同行交流，看到了他们对报纸的孜孜追求。一纸书香，如何流传？这是业界都在思考的问题。 	Day5: 重新认识生死  日本・四日市・あさけプラザ
メディアについての発信 福岡、西日本新聞社。同業者たちと交流し、新聞というメディアでの彼らのたゆまない追求を目にした。“文章を愛しインクの香りを楽しむ”さて、これをどうやって拵げていくのか？業界人だれもが考えている。	テーマ（医療・介護）についての発信 「生」と「死」について、あらためて認識した。

11 月 14 日／社会人／WeChat	11 月 15 日／社会人／WeChat
面对人口老龄化和少子化，日本认为对下一代的教育再不仅仅是学校的事情，而是需要地区(政府)、社区、学校共同参与，并通过立法确定了社区协作、多方参与的组织模式，推动社区学校建设，让国民明白参加社会教育是社区各种社会力量应尽的义务，让全社会参与学生教育，帮助他们树立未来发展的志向，以一种“嗯，我就是这样”的自信朝着自己想要的方向发展，而非取决于学生的考试成绩👍 	在「日中友好会馆」的安排下，这次赴日难得地来到了明治维新发源地——萩市，并住进了日本人的家里。 接待我们的家庭，男主人和女主人都是艺术家，都有自己的各种作品，也曾在中国办过艺术展，对中国和中国人非常亲近。昨晚我们住在他们位于深山里的屋子，喝着各种清酒畅谈到夜里，听闻他们喜欢邓丽君，我们几个小伙伴一起唱了一首《月亮代表我的心》。 虽然语言并不是特别通畅，但半天多的时间里，真的相处得十分愉快。「不要忘了回来，你们永远是我们的家人」，「不要忘了来中国找我们，你们永远是我们的家人」。 愿中日永远友好！ 
テーマ（教育）についての発信 少子高齢化に直面している日本では、次世代の教育を学校だけの問題とせず、行政・地域・学校の共同参加が必要だと考えている。法律でも、地域共同参加や社会の各分野が参画するモデルを制定し、地域における教育建設を進めている。社会教育に参加することは地域の人々が果たすべき義務だと、知らしめている。社会全体で子供の教育に参加し、子供たちの将来の成長を支え、「うん、私はこれでいいんだ」という自信をつけさせ、自分が思い描く将来の姿へと成長させる。日本では試験の成績だけで子供の能力を判断することはないのだ。	ホームステイについての発信 日中友好会館の手配で、なかなか訪れるチャンスのない明治維新の発祥地-萩市を訪れ、日本のお宅でホームステイをした。私がお世話になった家庭はご夫婦ともに芸術家のお宅で、たくさんの作品があり、中国でも芸術展を開いたことがあるそうだ。中国にも中国人にもとても友好的だ。昨夜は山奥にあるご夫妻のお宅に泊まり、各地の日本酒を味わい、夜半まで語った。彼らがテレサテンが好きだと分かり、一緒に泊まった仲間とともに、「月亮代表我的心」を歌った。 言葉は十分に通じるわけではないが、半日余りの時間は本当に心から楽しかった。「もう家族だから、必ず帰って来てね」「もう家族だから、必ず中国に会いに来てね」。 中日の友好よ、永遠なれ！

7. 報告会での帰国後のアクション・プラン発表



- ・WEIBO(ミニブログ)、WeChat、TikTokなどのSNSで訪日の見聞や収穫を公開する。
- ・ゴミの分別、自動車が歩行者を優先することなど見聞を共有して、より多くの人が文化的な現代社会のあり方を実践するように促す。
- ・身近なメディアの同業者や医療関係の知人に向け、日本で撮影した写真や動画を入念に編集し整理して提供し、日本での見聞、特に医療分野の進歩を皆と共有する。さらに、適切な方法を通じて企業とも連携し、健康診断分野での協力や学術交流が展開できるよう、模索していく。
- ・日本のメディアの発達ぶりや高齢者介護事業の状況を伝える。日本での見聞を省内の保健衛生部門の関係者に伝え、話し合い、高齢者介護事業の良い手法を導入する議論を展開する。
- ・将来、機会があれば、子供を日本に留学させて、物事に真面目に取り組む姿勢や進んだ科学技術の理念を学ばせれば、帰国後に祖国の産業の発展や進歩に助力し、中日友好の使者となり得る可能性もあると思う。



- ・帰国後は、日本の教育分野とメディア分野の良い理念や施策を総括して、勤務先で報告会を行い、日本滞在中の見聞や体験を紹介したい。
- ・ホストファミリーととても良い友人になることができ、連絡先も交換した。今後は常に連絡を取り合い、互いの理解を深め、友情をはぐくみ、中日友好のために微力を尽くしたい。また、日本の友人にももっと中国を知ってもらいたい。
- ・滞在を通じて、日本についてより深く、幅広く理解を深めた。今後は日本語学習にも取り組み、日本の各分野の理解を深めたい。
- ・自身も教育セクションや子供記者のプログラムを担当しているので、後日記事として、SNSで子供記者やその保護者と訪日体験を共有し、質問に答える。また、訪問先関係者と連絡を取り合い、教育分野や子供記者プログラムの展開などについて交流し、話題を共有する。可能なら、両国で子供記者の相互訪問を展開する。